

私の為に死ね！

教則 一

「さて、ここで突然問題です」

「はあ？」

新しいクラスにも慣れた、ある夏の日。

「私はあなたの、何でしょう？」

「ただのクラスメイトじゃん？」

雲一つない晴天が見渡せる学校の屋上で。

「ぼっか！ そう言われたいから呼び出したとでも思っ

てるの？ 少しは頭を捻りなさい」

「うるせえ！ 訳わかんねえこと言ってるねえで、さっさと用件を言え！」

昼休みという大事な時間を割いて。

「言われなきやわからないわけ？ ほんつと間抜けな頭

だこと。まあ、元から何も期待してないけどね」

「…：僕を馬鹿にする為だろ？ そんなことわかりきっ

ているぜ！」

暑い日差しを存分に受けながら。

「なぐに言ってるのよ。そんなの今に始まったことじゃ

ないわ。私が言いたいのは、一つ」

「ああ？」

この私、楠木メイはこいつを怒鳴っていた。

「立場をわきまえないさい！ 今度その呼び方を出したら許さないから！」

「…：ああ、悪かったよ。お・嬢・様！」

ことの始まりは、ある占い師からの手紙だった。

「あなたは七月二十四日に死ぬ」

死の宣告だ。私は当初、所詮占い。馬鹿馬鹿しいと思わなかった。

それを、マジでヤバイ、洒落にならないと囁し立てた

のは友人達だ。どうも、その手紙の内容ははずれないらしい。

その占いは、一風変わっている。占い師から封筒を渡

され、口頭で注意することを言われるのだ。中の手紙に

は、占いを受けた人の近い未来について書いてある。

手紙は三種類ある。普通の白い紙。縁が黄色い紙。縁

が赤い紙。三つはそれぞれ意味が違っている。白は、ほ

ぼ良い占い。黄色は怪我などに関わる占い。赤は死に関

わる占いである。私は、見事に赤い紙を引いたのだ。

占いには、ルールがある。普通の紙の人はただ、言わ

れたことを守るだけ。しかし、縁が黄色、赤である紙を

引いた場合次のことも守らなければならない。

『占いに関係する人に占いの内容を伝えてはならない』

『長く手紙を手元に置き続けてはならない』

この二つだ。また、死に関わる占いだった時は特別で、手紙に提示されたそれを避けるための行動もしなければ意味がないという。

占いを受けた一週間後、一緒に行った友達のお占いの結果が出た。友人の一人は去年無くした物を見つけ、もう一人は運命の人に出会ったという（全く、馬鹿な話だ）。

そして、ある事件が起こった。隣のクラスのお男子の子が、死んだ。聞くと、彼の死には占いが関わっているという。クラスメイトにそのお男子生徒と付き合っていた子がいて、その子の話を人づてに聞いた。詳しくはわからないが、そのお男子は一ヶ月ほど前に彼女と占いを受け、赤い縁の紙をもらったという。彼はどうしても占いを信じず、何もせずに昨日を迎え、足が着くはずの浅い川で溺死したという。

そもそも、私は占いを信じない。占いをしたのは、ただの友達の付き合いだったからだ。何を言われても参考以上にするつもりはなく、手紙も机の奥に仕舞っておくつもりだった。

それは、今、こうやって私の手元にある。私は決心し

たのだ。生きるための最善の努力をしてやる、と。

「ただいま」

がちやん、と音を立ててドアが閉まり、帰ってきた私を家事見習いが出迎える。

「おかえりなさいませ」

こいつの名前は、東郷豪朗。強そうな名前だけが取り柄の、全くの駄目男だ。

「飯、風呂、趣味、どれにする？」

「まさか夕食、作りたてでしょ？ 冷ますと悪いから、先に済ませるわ」

「もちろんだ。今用意するから、座つとけ」

今年の五月中旬から、ここでバイトをしている。

「早くしなさい。一分待たせるごとに一時間分減給だから」

「やめろお！ 今だって十分少ないんだ、なるべく早く持つていくからさ」

「口より先に手よ、手。ほら、今二十秒過ぎたわよー」

「ご丁寧にとストップウォッチかよ！ そら、そら、そらー！」

「すごい！ 料理がどんどん並んでく……」

台所から料理、食事道具、調味料がどんどん運ばれてくる。最後にご飯と味噌汁が乗ってフィニッシュ。

「ほら、終いだ。何か文句あるか？」

「ある。このイカとガーリックのソテー、少しこぼれているわ。三点減点ね」

「ずいぶん厳しいな。つて、いつの間に点数が！」

「ふふん、私が何もせずに見ているだけだと思ってる？ 私は甘ちゃんじゃないのよ」

「どこの姑だ……。そこまでのクオリティをバイトに求めるんじゃないよ」

「あら、辞めてもいいのよ？ 別に正規の人に頼んでもいいからね」

「人の弱みに付け込むな！ どこのお嬢様だ、この野郎」

「メイお嬢様と呼びなさい。あと、野郎って言葉は、女の子には当てはまらない言葉だから覚えておきなさい。学校で恥をかくわよ」

「……」

「……味噌汁の味が濃いわ。減点ね」

「勘弁してくれ」

なぜこいつが私の家で家事見習いをしているのか、それにはもちろんいくつかの理由がある。まず、今現在家

に私しか住んでいない、ということ。一ヶ月前に、「外国で仕事がある」と、あっさり娘一人残して両親が出ていった。笑いながら「もう年頃なんだからいいでしょ？」って、だから危ないんじゃないのかな？ お母さん。世間知らず。お父さんはお父さんで「……」とだんまり決め込むし。

そして豪朗、こいつの境遇がある。(豪朗はこれが一番の理由だと思っているだろう。彼は近くの全ての商店でマークされている。何年か前に、事件が起きて周囲が全く受け入れてくれなくなったという話だ。その彼が、バイトをしないと生活できないという状態になり、土下座をして頼んできた。

最後に本当の狙い、占いの内容だ。これは豪朗には内緒だが、二十四日に、身代わりになつてもらおう予定だ。見知らぬ誰かに頼めることでもないし、もしもの為に彼が必要なのだ。

夕食を終え、手近にあるメモを手取る。

さらさらと品目をいくつか書き終えた所に丁度召使いがやってきた。

「召使い。ほら、これ」

「その呼び方、学校で出すなよ」

「はいはい。あんたじゃないんだから安心して」

その言葉に少しイラつときたみたいだが、メモに目を

移して、首を傾げた。

「何だ、コレ？」

「買ってくるもの」

「ちやうちやう、コレだよ、プロレス技みたいなのやつ」

「どれ？」

「スクリュードライバー!! モス、コミュニール!!」

大げさにプロレスの真似事をして見せる召使い。

「馬鹿ね。カクテルよ」

「……酒か！ まだ未成年の癖に」

「うるさいわね。そんな気分にもなるのよ」

「そうか、失恋したのか。なむなむ」

「……ほらほら。仕事しなさい」

……豪朗には、何を言っても理解されないだろう。たぶん彼がこんな境遇に立つても、この感情を一生抱かないだろうし。

夏休みに入った。不安は日々募るばかりであったが、(期末テストはそこそこの出来だったが)とうとう、例の日の前日となった。寝起きは悪くない。

そうだ、今日は土曜日、バレーボールの練習試合があ

るんだった。

時間は七時四十分、早めに起きておこう。

身だしなみを整え、顔を洗いに洗面所へ。

「でれーん。やせいのすっぴんおんながあらわれた！」

なんと、馬鹿が立ち塞がった。

「……死にたいの？」

「すみません、冗談です」

「掃除なら邪魔にならないようにやりなさい」

「へいへい」

返事ははい、でしょと口に出した時、言うべき用件を思い出した。

「そういうえば、明日のこと、覚えているでしょうね？」

「ああ。モテる男はつらいね」

「あ、今日は外で食べてくるから。用無しね」

「ちっ、わかったよ、やることだけはやっておく」

「そ。ほら、朝食を用意しなさい」

「了解した」

豪朗は、そう言う素早く台所へ向かった。最近では明確な指示があれば、機敏に行動できるようになってきた。感心、感心。

顔を洗って部屋に戻り、鏡を前に軽く化粧をする。

「大変だ!!」

ガツとドアを開け、こちらを向いている馬鹿一人。

「この！」

「へぶし!!」

立ち上がってワンステップ、みぞおちに回し蹴りを見舞うと、二メートル程吹っ飛び、壁に激突して動かなくなった。

「ひ、ひどい……」

「ノックもしないって、どんだけ無神経なの!？」

「き、緊急だったんだ……」

腹部を抱えて、痙攣している馬鹿。

「で、何？」

「どうとうベランダの花が……枯れた」

そして、ガタツと倒れ込んだ。

「どこが緊急なの!？ それより朝食は？」

「……」

おでこを指で弾いても、反応はなかった。

結論から言うと、朝食はできていた。さっと食べて歯を磨き、身支度を整え、最後にトーストが半焼けだった怒りを使用人へとぶつけた。

「トースト焼けてない！」

「ばぶち!!」

とどめを刺したようで、俯せて立ち上がらなくなった。

「じゃあ、行ってくるから」

後ろ手を振りながら、市の体育館へと向かった。

午前中の練習が終わった所で、昼休みとなった。昼食を用意していなかったなので、同じ境遇の友人達と近くのコンビニへ。

「ん？」

「あれ、メイ何見てるの？」

「……ううん、気にしないで」

洋服屋に入っていくクラスの友人と馬鹿に似た人物を見た気がした。

「でさー、向こうの学校のセンコー、まじウザくない？」

「そうそう。ずっとこっちガン見してたよねー」

「本当？ キモー!!」

確かに、こっちの運動服が珍しいようで、ちらちらと

練習中もこちらを見ていた。

「あんなのが先生だと苦労するだろうね」

「うちらのおじいはまだ恵まれてる方かも」

「そうかなー」

「そういうえば、ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「へ？ 何？」

「メイって東郷くんとどういう関係？」

「私も気になる！ この間一緒に帰ってたよね！」

「……部活が無い日の気まぐれが仇となった。」

「人違いじゃない？」

「うっそだあ。一緒のクラスでしょ？ 何かあったんじゃないの？」

「別に、何もないよ」

苦笑気味に、話を受け流す。

「そう。絶対面白い展開になると思ったのに」

「ねー。どうしようメイにも……って皆思ってたんだよー」

「それはないよー」

「触れられたくないことを察してか、軽く流してくれた。」

「そういえばさー……」

その後も他愛のない会話を交わしながら、サンドウィッチ、メロンパン、レモンティーを買って、体育館へと戻っていった。とりあえず明日の朝、豪朗を蹴っておこう。腹いせだけど。

家に帰ると、風呂の用意がされており、冷蔵庫に「デザートまであるという。」

「……」

入っていた箱を開けてびっくり。そこにはチョコプレートに「誕生日おめでとう」の文字が。

「誰の誕生日じゃー！！」

と、ケーキをひっくり返したかったが、普通に食べる。うん、うまい。私はチーズケーキ派だけど、ショートケーキももちろん好きだ。おいしいければ全て良し。満足して私は床についた。

「で、誰の誕生日だったわけ？」

「ん？」

「昨日のケーキ」

「いや、ただ安かったただけだ。気にするな」

「そう」

無関心にオムレツを口に運ぶ。美味。

「御馳走様」

さっと朝食を済ませて、時計を見る。十時過ぎだ。

「あ、そうだ」

「ん、どうした？」

残った食事にラップをかけている使用人に近づき、ロキックをかます。

「昨日の怒り！」

「へぶし！！」

ラップを落とし、左足を痛そうに押さえる召使い。

「ぼ、僕が何か悪いことしたのか……？」
返事をせずに、自室へと戻った。

「ほら、行くわよ」

「ちよつと待て、きちんと靴ぐらい履かせてくれ」

ほらほら、と急かせながらこれからどうするかを考えていた。時間はまだある。

「ん？ どうした」

「ちよつと、焦げ臭くない？」

「そうか？ どっかで何か燃やしているんだろ」

「そうね、どうでもいいか」

今日も暑くなる。強く照りつける日差しの中そう思いながら、私と召使いは駅へと歩き出した。

『当日の午後二時に、市内で親しき男性を連れていけば、その人が身代わりになる』

これが私が携帯にメモした手紙の内容だ。シンプルなものだが、なるべく慎重に行動しなければならない。

「これとこれ。あ、これも良かったし、買うわ」

「へいへい」

「重そうな態度しないの。毅然として立っていなさい」

「重たいんだよ。足も痛いし」

「根性無いわね」

すでにいくつか有名な服屋を回ったので、複数の紙袋

を荷物持ちは抱えていた。

「めぼしい物はだいたい見たから、出るわよ」

「へいへい」

時間はもう正午を過ぎている。

「お腹が空いたし、そろそろ昼食にしましょう」

「おうよ」

「あんまり歩きたくないし、ここの最上階で良い？」

「そうだな」

直ぐに話が決まり、最上階のレストランが集まるフロアに出る。

「私イタリアン」

「……僕に選択権はないのね」

「もちろん。拒否権もないわ」

うどん屋の隣にあるイタリアンレストラン「ボルツォーネ」へと入る。

「いらつしやいませー」

「二人、禁煙席で」

「かしこまりました。こちらへどうぞー」

店の中は適度に混んでいる。しかし、運良くあっさり
と窓際の席へと通された。

「すぐメニュー持ってきますねー」

間延びした声を残して、ウェイトレスは去っていった。
彼女に私たちはどのように見えたのだろうか。

「ちよつと、豪朗。キョロキョロしないの。見苦しいわ」

「いや、ここ初めてだしさ。落ち着かなくて」

豪朗は、『高級レストランに来た小学生』的な落ち着かない雰囲気醸し出していた。

「メニューどうぞー」

お冷とメニューを持ってきたウェイトレスと目が合う。苦笑いを返された。

「決まったら、呼んでくださいね」

「あの、これとこ……痛！」

思いつきり足を踏んでやる。

「は、はい？ どうかなされましたか？」

「気にしないで下さい。また呼びますので」

「そうですか、かしこまりました」

再び、苦笑いをしながら帰るウェイトレス。

「ちよつと、あんたはどれだけ空気読めないの？ あんたが良くても私が決めてないのよ！ 変なことしないで」

「いってってって。わかった、すまん、ごめんよ」

謝ったところで、足を離してやる。まったく、どれだけ私に恥を搔かせれば気が済むのだから。さっきは試着用にストックしておいた服全てレジに持っていこうとするし……。

「もう、余計なことしないでよね」

店を出て、とにかく歩き出してからそう言う。

「わかった、わかった。で、これからどこに行くんだ？」

「丸井の方にある、CDショップに行くつもり」

「は!? さっきのモールにもあったじゃねえか」

「あつちがいのよ。つと、と」

後ろに気を使っていた為、あまり前を気にしていなかった。それで、人に肩をぶつけてしまった。

「ち、気をつける！」

柄の悪い男が、こつちを見て怒鳴る。

「ごめんなさい」

と、その男が豪朗を見ていることに気がつく。そして、豪朗が振り向いた瞬間、いきなり叫びだした。

「て、てめえ、ゴローじゃねえか！ 待ちやがれ！」

「わ、だ、大悟、さん!? 走るぞ！」

言うが早く荷物を全部片手に移し、私の手を掴んで走り出した。

「え、え？ 何？ 知り合い？」

「話は後、撒く」

幸い人混みに紛れたので距離は開いた。遠くで男が電話をかけているのがわかる。道を右に折れ曲がり、数えて四つ目の建物へと隠れた。

「ちよつと、あいつは何？」

「知り合いだ」

息を切らしながら、少し休憩する。幸い、あの男はこちらに気付いていないようで、道を直進して行った。

「どんな知り合い？　なんで追いかけられるの？」

「あいつは不良だ。遭う度俺を襲ってくる」

「どうして？」

その時、豪朗は少し表情を曇らせた。

「まあ、聞け。中学生の時にとある事件があって、その被害者の遺族から怨恨をくらっている」

「あんた加害者なの？」

「いや、違う。僕は悪くないんだ。その場に居ただけ」

「ただどその人達にしたら違ったみたいで、僕を恨み始めた」

「どうして？」

「そこは割愛するよ、話が長くなる。んで、その遺族の父親が町の重役で、兄貴が不良。お陰で苦勞三昧。街で出会うとこんな風に追いかけられるしな」

「普通そこまでする？　異常だと思うけど」

「極度のシスコンだったらしい。人って怖いよな」

「それじゃあ、私は関係ないわね。あんた一人捕まってるよ」

「ば、馬鹿！　自ら半殺しに遭いたくないぞ！？」　それに顔見られてるんだから、追われるだろ、いてて……」

「誰が、馬鹿ですって？　口の利き方に気を付けなさい」

「痛いって。今後気を付けますよ……」

「命令よ。で、捕まってる……殺される可能性は？」

「さあ。まあ殺されはしないとは思うけど、女だし何さ

れるかわかんないぞ？」

「そ、そうね」

死ぬというのとは、このことではないのだろうか。でも、あのような奴等から辱めを受けるのは、死ぬのと同じようなことだ。

先程通った道に目を戻すと、直進した男が戻ってきて、こっちに気付いたようだった。

「荷物、邪魔だな」

「置いてかないでよね」

「捕まるよりかはマシだろ？」

時間が無かった。しかし、私はそれをそこに置いて行くことを許さなかった。

「駄目、半分持つからとりあえず逃げるわよ」

そこを出て、どんどん裏道に入っていく。

「あ、逆のが……」

「もう遅いわよ」

男と私達の距離はあまり変わらない。問題は豪朗の体力不足だ。

「……隠れよう」

「もうへばったの？　だらしないわね」

部活で毎日走りこんできた私は、体力に自信がある。しかし、こいつは違う。豪朗は部活にも入っていないければ、体も鍛えているように見えない。

私は一つのことです迷っていた。豪朗を身代わりにする。それは彼をここに置いて一人で逃げる、ということなのだろうか。それならば、豪朗には気の毒であっても、捕まってもらった方が良いのではないだろうか。しかし、捕まっても死にはしない。別の原因の可能性もあるから慎重に行動したほうが良いかもという葛藤だ。逃げ回ってすでに数分が経っていた。

ここで状況が変化した。不良の自分が到着したのだ。置き去りにするなら今しかない、と私は決心すると瞬時に豪朗の荷物を引っ手繰った。

「な！ あ、ありがと、つてぶっつ！」

振り向きざまの膝蹴り。鳩尾に入ったらしく、豪朗はその場に膝を付いた。

「か、は……」

「元々はあんたの責任でしょ！ 悪く思わないでね」

膝立ちの豪朗を置いて、曲がり角に入った。一人なら、逃げる自信がある。

「そろそろ収まったかな」

下の方は静かだ。あるビルの屋上に、私は居る。

逃げ切った私はこの状況が収まるまでどこかに隠れることを考えた。見晴らしが良く、普通では来ない、目立たない場所。すぐに、ビルの上だという結論を出した。

「え……ちよ、ちよっと、何で来るの!？」

安心していた所なのに、下から子分（と思われる）高校生が階段で上ってきた。

流石に男を一瞬で伸すことはできない。ここに逃げ場はない。あるのは、階段と手すり、排水溝に換気扇、持っているのは服の入った紙袋。

「何かない、何かないの？ て、なんでロープが!？」
紙袋に、何故かロープが入っていた。長さは一メートルと少しほど。

「で、でも、これなら」

急いでそれを持ってビルとビルで影となる方へ。

時間が無い。でも私ならできる。そう、信じた。

「スカートで来るんじゃないか……」

今、私は空にいる。

左手に紙袋、右手にロープ。今できる、唯一の隠れ方。

その状態で、男が上ってくるのを待つ。

「あれ、誰か居ると思ったのに。おかしいなあ」

気が抜けた声が聞こえた。どうも、私を捜しに来たに
しては様子がおかしい。

「流石にこんな所に女の子がいたら危ないか。見間違いか、幽霊を見たのかも」

どうやら、下の様子を見ていた私を自殺願望者か何かだと思っ
て上がってきたみたいだ。追ってきたのではないらしい。

無駄に隠れただけだった。丁度良い。上がるのを手伝ってもらおうと声を出す、その時だった。

「ねえそこ……」

「おう、あんた、こんなところで何してるんだ？」

……不良の声が、した。いつの間にながら上ってきたんだろう。

「いえ、な、何も」

「そうか、あんた一人か」

「は、はい。何か用ですか」

「人を捜しているのだが、誰かここに来なかったか」

「……いいえ、誰も見てないです」

「なら良いわ。ほら、あんたも降りるんだろ？ 先に行きな」

今の不良は多分私を探している奴だ。助けて、と叫びたかったが、わざわざ見つかるような真似はできない。

すでに腕は疲れていた。時間が無いことを理由に、浅はかな行動に移ってしまったことにひどく後悔する。もしここから落ちてしまったら、死は免れないだろう。ビルの五階から落ちるとはぼ、同じなのだから。

「う……そ……」

ほんの数分後、足音が戻ってきた。同時に、緊急事態が起きた。手の痛みよりもやばい。

結び目が、解けてきたのだ。

自分が助かるには、命乞いをするしかない。例え、どんなに辛い仕打ちがあっても。

階段を上がる足音が屋上に達したところで、私は叫んだ。

「お願い！ 助けて！ 落ちそうなの！」

仰ぎ見たその男の顔は見るも無残に腫れ上がっていて、そして見慣れたものだった。

「間に合って、本当に良かったぜ」

なんと、来たのは豪朗だった。なんとかここまで上げられたが、途中で重いと云ったので、拳骨をお見舞いしてやった。

「ありがとう。まさかあんたが来るとは思わなかったわ」

「ま、まあな。蹴り食らつといて、よく頑張れたと自分でも思う」

「……あの時は、ごめんなさい」

「まあ、いいさ。あの後逃げられたしな」

「え!? 捕まらなかったの!?!」 じゃあ、その傷は何?」
体中が腫れたり、痣ができていた。服には足跡も残っている。

「街中行った時、人混みの中こけて踏まれた。ある意味リンチだな。身動きできないしよ」

「どうして街の方行ったわけ？」

「むしろ、メイお嬢様がビルに上った理由の方が聞きたいぜ。八方塞りじゃん」

「な、何よ。隠れるって言ったら、屋上じゃない」

「浅はかだなあ。あいつらは男だけなんだから、女しか入れない所に逃げ込めば良かったじゃないか」

「う、うるさいわねえ！　そこまで頭が回らなかったの」
「まあ、考えるより先に治安の悪い街外れに向かう位だもんな」

「人が少ない方が走り易かったのよ！　悪い？」

「逃げ慣れてなきや、仕方がないか。まあ、早くここを離れようぜ」

「それもそうね」

「豪朗が来てくれなければ私は死んでいた。確かに、占いは当たったのかもしれない。そう考えながら、帰路に着いた。」

「今回のことで、少し見方を変えるべきね。逃げるって言う取り柄も見つかったし」

「まあ一人で逃げることはできないぞ」

「使えないわね。やっぱりやめた。だけど、私の呼び方だけは変えても良いわ。『メイ様』どう？」

「相変わらず様付けかよ!?　せめてお嬢にしてくれ」

「そんな極道の娘みたいな呼び方は御免だわ。まあ、もつと精進することね」

「く、上等だぜ！」

「ほら、もたもたしないで行くわよ。豪朗」

「足痛いんだってえの」

「遅い！」

「豪朗が足を痛めていたこともあり、家に帰ってきたのは夕方になってしまった。」

「ほら、早く夕飯の用意をしなさい」

「おっと、ここまで遅くなると思わなかったから何も用意してないぞ？　何か買ってくれば良かったな……今日はいんスタント物で我慢してくれ」

「仕方がないわね、今日だけよ。明日からはちゃんと作りなさい！」

「わかってる。明日からも、よろしくな」

「照れ臭そうに言うこいつは、珍しい。まあ、もう少しならこいつと付き合っても良いかな。」

「そうね。明日からもちゃんと働きなさいよ！」

「あ、そうそう」

「どうした？」

「あんたが居なければ、私も死にそうにならなかったんじゃないの？」

「……そりゃあそうだろう」

「この馬鹿！」

左のローキック。

「いや、なんで!？」

「ところで、どうしてロープが入っていたか、知ってる？」

「それは……」

その後、あの占い師は、どこまで未来がわかってるのか、そんなことを考えて寝た。ちなみに、その日見た夢は、学校で豪朗をめった打ちにするもの（変な仇名で呼ばれることは、やはり不快だ）であり、ひさしぶりに快眠できた。